

ぐんまの「魚道」を考える（最終回）

今回で最終回となりますが、改めて魚道をめぐる問題点等を整理したいと思います。

1．魚道とは

河川は、洪水等から人命や生活基盤等の資産を守る“治水”、水道水・農業用水・工業用水利用等の“利水”等を目的とした利用が古くから行われてきており、生活をして行く上で極めて重要な公共財です。

河川の利用や治水を目的とした施設は、魚類の生息環境のみを考えれば不要の物ですが、取り除くことは困難であるため、この対策として非常に古くから設置されてきた施設が“魚道”です。本質的に考えれば、魚道はあくまでも移動障害という悪影響を緩和する補償手段（ミティゲーション）にしかすぎません。このため、魚道はその河川横断施設が付けられた以前の魚の移動量を継続的に補償することは、極めて困難と考えられます。このような背景から、過去には、河川横断工作物への附加的サービスとの発想で安易な構造の魚道が設置されてきたことも事実であると思います。

2．不要な魚道

魚道は遡上（降下）しなければ生存上困る魚類に対して支障となる位置に設置されるべき施設です。最近の河川や溪流では、“管理釣り場”といっても過言ではない漁場管理を行っている例（魚類の再生産が期待できない）が増加してきていると思います。このような河道内の河川横断施設には魚道は必要なのでしょうか。

その一方で、海から遡上するアユ・サクラマス・ウナギ等の移動経路にある河川横断施設に設置してある魚道の機能不全や新たに生じた段差に対応が出来ていない現実と、前述の不要（重要性が非常に低い）な位置に新たな魚道が次々に設けられている事実があります。

3．魚道の構造問題と維持管理

新しく設置されている魚道の構造は、概ね良好です。これは、魚道に関する技術等が向上してきたことや河川法に“環境”が付加された事によると思います。ただし、一部の魚道は河川条件の検討が不十分であり、問題も残っています。

構造問題として、隔壁の損傷と魚道入口の段差問題が多く見られます。特に目立っているのが、魚道入口の段差の発生問題です。河川の上流側で治山・治水・護岸工事等が進んできているため、上流から供給される土砂の量よりも流下する土砂の量が多くなってきていることから河床の低下が多くの河川で進行していると推定されます。このため、既存の魚道もこれから大きな影響を受けると考えられます。さらに、現状で問題の無い施設の下流が新たな段差を生じ、魚道施設が新たに必要となることが懸念されます。

魚道の隔壁は大きな洪水を履歴すると必ず損傷を受けます。魚道は、遠くから見た外見上では、魚道内部の確認ができないため、定期的に魚道を点検することが重要です。これまでの壊れた魚道が放置されてきた事例が示すことは、適切な点検が行われて来なかったことでもあり

ます。施設の点検は、誰が主体的に行うべきであろうか？

4．今後の魚道

既存の河川横断施設の一部を撤去して、魚類等の移動を取り戻す動きも一部に見られますが、この方式が広がって行くことは様々な問題から難しいと思います。これからの魚道のあり方は、受け身の立場から積極的に取り組む方向を目指して行くべきではないでしょうか？すなわち、魚類の生活様式を考慮した既存河川の横断移設における「生態的な評価」を進め、河川横断施設の重要度を整理して、魚道の補修や新設の道筋を示すことではないでしょうか。縦割り行政で止むを得ない話でもありますが、山奥に維持管理も難しそうな大きな魚道を作って、一洪水で機能不全に陥り、復旧出来ない現実を見ると悲しくなります。その魚道の設置費用を重要度の高い位置の維持補修等に利用したいものです。

こんな取水施設にも
簡単な魚道は欲しい。
(烏川)



(あしがき)

構想が練られないで作成した「読みにくい」レポートを12回に亘って読んで頂きありがとうございました。

海と山が川で繋がり、美形・美味で引きの強い天然遡上アユを身近な川で楽しめる日が一日でも早く来ることを目指して、今後も「川とアユ達」と付き合っていきたいと思います。

(日本一のアユを取り戻す会 福田睦夫)